

保育実習（施設）の意義について（2）

－ 実習を終えた学生のアンケートから見えるもの －

服 部 次 郎
谷 田 貝 雅 典

岡崎女子短期大学研究紀要44号 抜粋

平成23年3月1日

保育実習（施設）の意義について（2）

－ 実習を終えた学生のアンケートから見えてくるもの －

服部次郎*
谷田貝雅典*

要旨

先回の論文で施設実習の意義を明らかにすることができたが、今回は、2010年に施設実習に参加した学生に対して新しい項目を追加したアンケートを実施して、先回得られた結果の再検証を行うとともに、新しい「施設実習仮説モデル」を定め、それを用いて、アンケートの各項目の関連を統計的に分析し、施設実習を効果的にする要因を明らかにすることができた。

Abstract

In our last thesis we have verified the value of the student training for care-workers at social welfare facilities, and in this thesis we have added new items to the last questionnaire and tried to reaffirm the results that we got in our last thesis and also tried to analyze the relationship between the items in the questionnaire statistically by using a new model called "hypothetical model about student training at social welfare facilities", and clarified factors that makes student training at social welfare facilities effective.

はじめに

筆者の一人、服部は岡崎女子短期大学で保育実習（施設）を担当し、現在8年目となる。2009年度入学し、2010年春季および夏季に実習を受けた幼児教育学科第一部の学生全員を1年生から2年生にかけて指導し、事前指導、見学実習、本実習、そして事後指導の全てを一人で担当してきた。先行研究¹⁾において、施設実習は、実習前は大きな不安を感じていた学生が、実習を終えた後の事後指導でのアンケート等において、施設実習は「とても意義があった」と感じたり、施設実習を受ける前と、受けてからの自分の変化について「とても変化した」と感じていることを統計的に明らかにすることができた。本稿では、前回明らかになった点¹⁾を再検証するとともに、アンケート様式の一部を改良して、多変量解析ができるようにした。さらに新しい項目を追加し、共同研究者の谷田貝が「施設実習モデル」という仮説モデルを定め、共分散構造分析する。

1 研究の目的

先行研究¹⁾より、さらに必要と考えられた点を追

加するとともに、主観評価と客観評価を導入し、より多角的に実習の効果について検討することとした。ここでいう主観評価とは、自己の実習満足度を指し、客観評価とは実習先施設から評定していただいたものを指している。以上より、今回は「施設実習仮説モデル」（図1）を定め、アンケートの各項目の因果関係を共分散構造分析し、実習効果を向上させる要因を明らかにする。本結果から今後、どのような指導や対応が望ましいかを考察する。

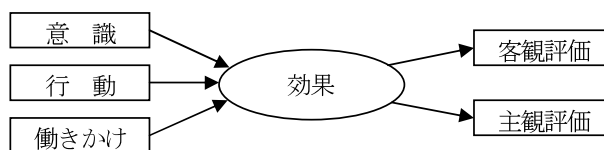


図1 施設実習仮説モデル (MIMIC)

2 研究方法

2.1 調査方法

2009年度入学生の内「保育実習（施設）」（以下施設実習と称す）を履修した学生199名に対し、質問紙調査（6項目5段階評定尺度）を実施した。また、受け入れ先の施設より評定して頂いた、4段階による実習評価を得た。

* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

本研究では、実習先施設の違い、および実習実施時期に従い、下記の4つの母集団を設定した。

〈実習先施設〉

- ・養護系施設（児童養護施設121名、乳幼児施設4名）
- ・障害者施設（74名）

〈実施時期〉

- ・2010年2月～3月実施（1年93名）
- ・2010年7月～8月実施（2年106名）

2.2 仮説モデル

一斉講義や、同一課題による演習の教育効果を規定する場合と違い、施設実習の効果を規定するには、多様な要因と、多角的な評価が必要と考えられる。そこで、今回の質問紙調査から、実習に対する「意識」や「行動」、および教授者の「働きかけ」から、実習の評価を予測するモデルをデザインする。また、実習の評価に関しては、実習先から評定して頂いた値を客観評価と定め、質問紙調査より自己の実習満足感に関する項目を主観評価と定め、多角的に実習評価を規定する。以上をモデル化するために最適な分析手法は共分散構造分析である。共分散構造分析は、本研究のような多要因の因果関係をうまく説明できる手法である。共分散構造分析によるモデル化に先立ち、本研究の仮説モデルを図1に定める。図1のモデルはMIMIC (Multiple Indicators Multiple Causes) ⁽²⁾⁻⁽⁴⁾とよばれ、本研究のように多重指標・多重要因を説明する際に、よく用いられるデザインである。

3 調査・分析の結果

本研究で用いた共分散構造分析のためのアプリケーションソフトは、Amos 7.0.0 (build 1177) である。

2.2.で示した仮説モデルを基本デザインとし、実習先施設別、実施時期別の計4母集団を設定し、個々のモデル適合度を参照し、配置不変性モデルであることを検証したのち、多母集団の同時分析を実行した。また、適合度の観点から、誤差変数e1とe2の間に誤差相関を設定した。以上より、得られた結果を図2に示す。図2のモデル適合度は、 χ^2 検定で棄却されたが、ホルターの臨界標本数 (CN) を超える398標本 (N) であることから χ^2 検定は参照しない。AGFIとCFIはやや低めに算出されているが、RMSEAを参照すると0.046であり、モデルとデ

ータの適合度は高く、構成されたモデルは標本分散共分散行列をよく説明していると判断される。なお、図2中の各値は、紙面の都合上、行動計量学の慣例に習い「-0.06」を「-.06」と短縮した値で表記した。

3.1 施設実習評価への直接効果（非標準化解）

図2より、各観測変数（項目(2)～(5)）から施設実習評価への直接効果を検討する。

実習施設別で施設実習評価に規定力のある要因を検討する。項目(2)は、障害者施設 (0.20)の方が規定力が大きく、自分が変化したと感じた学生が、実習評価を上げる要因であることがわかる。対して、項目(3)は、養護施設 (0.22)の方が規定力が大きく、授業が役立ったと感じた学生が、施設実習評価を上げる要因となった。

次に、実施時期別で施設実習評価に規定力のある要因を検討する。項目(2)(3)(4)ともに、春季 (0.31、0.12、0.15) に実施した方が規定力が大きく、自分が変化した、授業が役立った、十分準備ができたと考えることが、施設実習評価を上げる要因である。実施時期別では、春季の方が効果的であるといえる。

3.2 総合効果

表1および表2より、各観測変数（項目(2)～(5)）から施設実習評価における、客観評価（施設からの実習評価）および主観評価（項目(1)(6)）への総合効果を検討する。

3.2.1 実習施設別総合効果

表1より、実習施設別に総合効果を検討する。まず、非標準化総合効果より、実習施設間の総合効果を比較する。障害者施設においては、項目(2)から、項目(1)(6)に対する総合効果が養護施設に比べ大きく、自分が変化したと感じた学生が、有意義であった、色々と学ぶことができたと評価する要因となっている。対して養護施設では、項目(3)(4)から、全ての評価に対して、障害者施設に比べ総合効果が大きく、大学での授業や、事前準備が施設実習評価を上げる要因となっている。また、項目(5)においては、項目(1)(6)に対する総合効果が障害者施設に比べ大きく、訪問指導はよかったと感じた学生が、有意義であった、色々と学ぶことができたと評価する要因となった。

次に、標準化総合効果より、実習施設別に各実習評価の総合効果の特徴を見る。養護施設においては、施設からの実習評価（客観評価）に対し、大きな規定力を示したのは項目(3)>(4)>(2) ≒ (5)の順であ

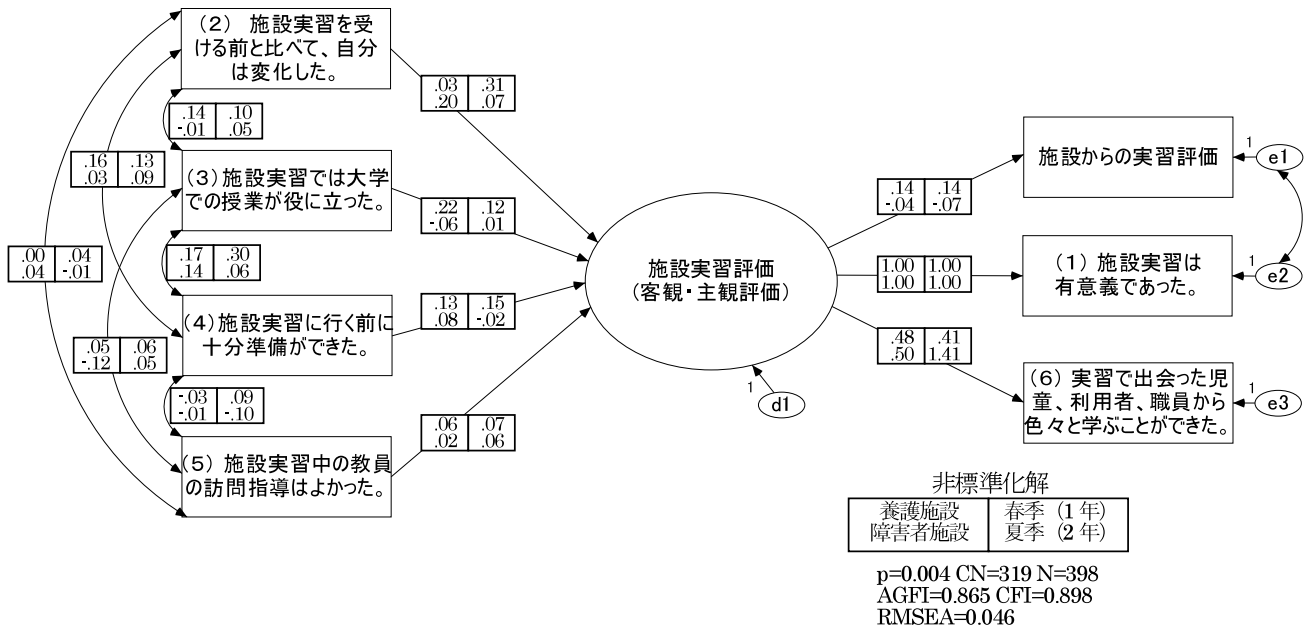


図2 施設実習因果モデル

表1 実習施設別総合効果

	施設実習評価					
	養護施設			障害者施設		
	施設からの実習評価	(1)施設実習は有意義であった。	(6)実習で出会った児童、利用者、職員から色々学ぶことができた。	施設からの実習評価	(1)施設実習は有意義であった。	(6)実習で出会った児童、利用者、職員から色々学ぶことができた。
(2)施設実習を受ける前と比べて、自分は変化した。	0.001 (0.006)	0.031 (0.030)	0.015 (0.022)	-0.007 (-0.008)	0.203 (0.266)	0.101 (0.338)
(3)施設実習では大学での授業が役に立った。	0.031 (0.046)	0.218 (0.245)	0.105 (0.185)	0.002 (0.003)	-0.056 (-0.108)	-0.028 (-0.137)
(4)施設実習に行く前に十分準備ができた。	0.018 (0.032)	0.126 (0.170)	0.061 (0.128)	-0.003 (-0.005)	0.076 (0.146)	0.038 (0.186)
(5)施設実習中の教員の訪問指導はよかった。	0.001 (0.013)	0.063 (0.071)	0.030 (0.053)	-0.001 (-0.001)	0.017 (0.028)	0.009 (0.035)

非標準化総合効果(下段:標準化総合効果)

表2 実施時期別総合効果

	施設実習評価					
	春季実施(1年)			夏季実施(2年)		
	施設からの実習評価	(1)施設実習は有意義であった。	(6)実習で出会った児童、利用者、職員から色々学ぶことができた。	施設からの実習評価	(1)施設実習は有意義であった。	(6)実習で出会った児童、利用者、職員から色々学ぶことができた。
(2)施設実習を受ける前と比べて、自分は変化した。	0.043 (0.051)	0.309 (0.256)	0.127 (0.244)	-0.005 (-0.007)	0.073 (0.087)	0.103 (0.170)
(3)施設実習では大学での授業が役に立った。	0.017 (0.025)	0.123 (0.123)	0.051 (0.117)	-0.001 (-0.002)	0.013 (0.019)	0.018 (0.037)
(4)施設実習に行く前に十分準備ができた。	0.021 (0.039)	0.153 (0.195)	0.063 (0.186)	0.001 (0.002)	-0.018 (-0.026)	-0.025 (-0.051)
(5)施設実習中の教員の訪問指導はよかった。	0.010 (0.013)	0.070 (0.063)	0.029 (0.060)	-0.004 (-0.007)	0.059 (0.083)	0.084 (0.161)

非標準化総合効果(下段:標準化総合効果)

った。よって、施設からの実習評価を向上させるには、第一に授業で得た知識を活用し、かつ実習に際し十分な準備をすることが効果的である。また、項目(1)(6)に対し、大きな規定力を示したのは項目(3)>(4)>(5)>(2)の順であった。よって、有意義であった、色々と学ぶことができたという主観評価するに当たっては、客観評価同様に、項目(3)(4)が重要であるほか、項目(5)の訪問指導がよかったと感じられることも、一定の要因と考えられる。障害者施設においては、施設からの実習評価（客観評価）に対し、大きな規定力を示した項目は無かった。また、項目(1)(6)に対し、大きな規定力を示したのは項目(2)>(4)>(3)>(5)の順であった。よって、有意義であった、色々と学ぶことができたという主観評価を向上させるには、実習の前後で自分は変化したと感じる体験や、十分な実習準備が効果的である。一方、項目(3)に関しては、負の規定力であったことから、授業の知識は役に立たないと感じた学生の多くが、高い主観評価を得ていた。

以上より、養護施設では、これまでの学びを中心に、よく実習準備をすることが、主観・客観評価に対し効果的であるといえる。他方、障害者施設では、実習の前後で自分が変化したと感じられるような体験を、実習中に経験することが主観評価に対し効果的であるといえる。また、主観評価が高かった学生ほど、大学での授業が役に立たないと感じていた。

3.2.2 実施時期別総合効果

表2より、実施時期別に総合効果を検討する。まず、非標準化総合効果より、春季と夏季間の総合効果を比較する。項目(2)~(5)から、主観・客観評価に対し規定力があるのは、ほとんどが春季に集中している。以上より、効果的な施設実習時期は、春季といえるが、夏季において唯一春季を上回る規定力を示したのが、項目(5)から項目(6)に対する総合効果であった。これにより、夏季に実施する施設実習では、学生が色々と学ぶことができたという評価する要因として、訪問指導が春季より重要であることが示された。

次に、標準化総合効果より、実施時期別に各実習評価の総合効果の特徴を見る。春季において、主観・客観評価に大きな規定力を示したのは項目(2)>(4)>(3)>(5)と、すべて共通していた。よって、春季の施設実習で、主観・客観評価を向上させるには、実習の前後で自分は変化したと感じる体験と、授業で得た知識を活用することが効果的である。夏季においては、施設からの実習評価（客観評価）に対し、大きな規定力を示したものは無かった。また、客観

評価に対しては項目(2)≒(5)>(4)>(3)の順であった。よって、主観評価を向上させるには、実習の前後で自分は変化したと感じる体験と、訪問指導が効果的である。

以上より、実施時期別では、夏季に比べ春季の方が、主観・客観評価に対し、明らかに効果的であるといえる。また、夏季に実施する場合は、春季と同様に、実習の前後で自分は変化したと感じる体験が重要であるとともに、同程度で訪問指導内容により、学生が教員の助言をよかったと感じることが重要であるといえる。

4 考察

4.1 施設実習における自分の変化について

これに関連する項目(2)は、障害者施設(0.20)の方が規定力が大きく、自分が変化したと感じた学生が、実習評価を上げる要因であることがわかった。具体的には実習後の学生の課題レポートからも明らかかなように、実習後、障害者への偏見がなくなった、障害があるなしに関わらず人は皆同じ価値を持つ存在である。ということを実感的に実感して、プラスに考えることができています。つまり障害者の施設での実習を通してこそ、自分の変化を感じ取り、自分が成長できたと評価できているためと考えられる。

4.2 大学の授業と施設実習の関連について

関連する項目(3)は、養護系施設(0.22)の方が規定力が大きく、授業が役に立ったと感じた学生が、施設実習評価を上げる要因となっているが、これは岡崎女子短期大学のカリキュラム編成の都合によるところが大きいと考えられる。つまり、保育実習(施設)の授業を1年生後期と2年生前期に担当している筆者が、同じ学生に対して、2年生の前期に養護原理という施設実習と関連性の深い科目を教えていることと関連しているといえる。さらに、1年生後期の保育実習(施設)の中で、児童養護施設への見学実習を実施するとともに、その施設の主任の職員より「施設実習に関する心構え」について特別授業を受けていることが養護系施設に対する理解を深め、不安を和らげることにつながり、結果的に授業が役に立っていると感じる結果になっていると思われる。授業の中で、施設の種別に関わらず、「施設調べ」と「先輩の体験談の紹介」は役に立つと聞いているため、この要因は差別化には影響していないと考えられる。

4.3 実習の実施時期について

施設実習評価に規定力のある要因を検討した結果、項目(2)(3)(4)ともに、春季(0.31、0.12、0.15)に実施した方が規定力が高く、「自分が変化した」、「授業が役立った」、「十分準備ができた」と考えることが、施設実習評価を上げる要因であり、実施時期別では、春季の方が効果的であることが明らかになっている。先行研究(1)においても考察したところであるが、春季実習に参加した1年生の学生は「当然のことではあるが、施設職員の方たちの言動から、いろいろと学んでいる感じがうかがえる。実習の意義についても、自分自身の変化についても2年生時での実習より大きな影響を受けていることが感じられる。1年生は実習経験の少ない分だけ、実習前も不安が強く、何事にも不慣れではある。その反面、より新鮮な気持ちで、また先入観をもたず実習に取り組むため、いろいろな驚き、発見も多く、実習経験をきちんと振り返ることができれば、学ぶことが多いといえよう。実習の意義についての評価、自分自身の変化が大きいと感じるのも、そのような理由によるものと考えられる。」という解釈があてはまるものと考えられる。

また表2により、春季と夏季間の総合効果を比較すると、項目(2)~(5)から、主観・客観評価に対し規定力があるのは、ほとんどが春季に集中している。以上より、効果的な施設実習時期は、春季といえるが、夏季において唯一春季を上回る規定力を示したのが、項目(5)から項目(6)に対する総合効果であった。これにより、夏季に実施する施設実習では、学生が色々と学ぶことができたと評価する要因として、訪問指導が春季より重要であることが示された。これは教員による施設訪問指導が、実習期間中に行われることの意義を証明しているものとして注目しなければならない結果といえる。

次に、標準化総合効果より、実施時期別に各実習評価の総合効果の特徴を見る。春季において、主観・客観評価に大きな規定力を示したのは項目(2)>(4)>(3)>(5)と、すべて共通していた。よって、春季の施設実習で、主観・客観評価を向上させるには、「実習の前後で自分は変化したと感じる体験」と、「授業で得た知識を活用すること」が効果的である。夏季においては、施設からの実習評価(客観評価)に対し、大きな規定力を示したものは無かった。また、客観評価に対しては項目(2)≒(5)>>(4)>(3)の順であった。よって、主観評価を向上させるには、「実習の前後で自分は変化したと感じる体験」と、

「訪問指導」が効果的である。

以上より、実施時期別では、夏季に比べ春季の方が、主観・客観評価に対し、明らかに効果的であるといえる。この理由については、すでに説明したとおりである。また、夏季に実施する場合は、春季と同様に、実習の前後で自分は変化したと感じる体験が重要であるとともに、同程度で「訪問指導内容により、学生が教員の助言をよかった」と感じることも重要であるといえる。このことから施設訪問指導の内容をより効果的なものとするため教員側も工夫をしていくことが大切であるといえる。

4.4 実習施設別の効果について

障害者施設においては、項目(2)から、項目(1)(6)に対する総合効果が養護系施設に比べ大きく、自分が変化したと感じた学生が、有意義であった、色々と学ぶことができたと評価する要因となっている。その一方で、養護系施設では、項目(3)(4)から、全ての評価に対して、障害者施設に比べ総合効果が大きく、大学での授業や、事前準備が施設実習評価を上げる要因となっている。この点については、上記4.1、4.2に考察したとおりである。また、項目(5)においては、項目(1)(6)に対する総合効果が障害者施設に比べ大きく、訪問指導はよかったと感じた学生が、有意義であった、色々と学ぶことができたと評価する要因となっている。これは障害者施設においては学生が自分自身で成長できた実感する可能性が高いのに比較して、養護系施設では、特に児童との関わり、特に信頼関係の形成で苦勞している状況において、訪問指導の教員から、困難な状況についての解説を受けたり、よく頑張っていることを評価されたりした結果、自信が生まれ、もう一度実習について冷静に振り返ることができたり、困難な状況の中でも、いろいろと学んでいることに気づかされたりするということが、実習の意義を再発見できたためと解釈できる。

4.5 実習の評価について

標準化総合効果より、養護系施設においては、施設からの実習評価(客観評価)に対し、大きな規定力を示したのは項目(3)>(4)>>(2)≒(5)の順であり、施設からの実習評価を向上させるには、第一に授業で得た知識を活用し、かつ実習に際し十分な準備をすることが効果的であることが明らかになった。これは解釈を加えるというよりは、日頃の授業がいかに大切かを再確認させてくれる結果として、当たり

前ではあるが、きわめて大切なものといえる。

また、項目(1)(6)に対し、大きな規定力を示したのは項目(3)>(4)>(5)>(2)の順であり、有意義であった、色々と学ぶことができたと主観評価するに当たっては、客観評価同様に、項目(3)(4)が重要であるほか、項目(5)の訪問指導がよかったと感じられることも、一定の要因と考えられる。今回、教員による施設訪問指導が実習評価に影響をあたえることが統計的分析でも明らかになったことの意味は大きいといえる。

一方で、障害者施設においては、施設からの実習評価（客観評価）に対し、大きな規定力を示した項目は無く、また、項目(1)(6)に対し、大きな規定力を示したのは項目(2)>(4)>(3)>(5)の順であった。よって、有意義であった、色々と学ぶことができたと主観評価を向上させるには、実習の前後で自分は変化したと感じる体験や、十分な実習準備が効果的であるといえる。一方、項目(3)に関して、負の規定力であったことから、授業の知識は役に立たないと感じた学生の多くが、高い主観評価を得ていたということになる。これは、意欲的である学生にとっては、現在の授業内容では不満足である意思表示と考えられるため、今後、保育実習（施設）や関連する授業において、何らかの工夫をすることが必要といえよう。

おわりに

本学では、施設実習を受ける学生が多数に及ぶこと、その一方で実習生を受け入れる施設、特に養護系施設には限界があるため、春と夏に学生を分散させて、実習をさせていただくという形を取ってきた。本来は、2年生の夏に実習をさせていただくことが、学習課程上望ましいと考えていたが、本研究結果から、むしろ春に実施する方が、効果的であることも明らかになった。

今後、機会を得て、実習生をご指導いただいている施設側の調査も実施し、指導者と学生双方から、多角的に調査分析することにより、よりよい施設実習のあり方を探るとともに、施設実習における学びをより明確化する必要もあると考える。

[引用・参考文献]

- (1) 服部次郎・谷田貝雅典：保育実習（施設）の意義について－実習を終えた学生のアンケートから見えてくるもの－，岡崎女子短期大学研究紀要第43号 p.47-54
- (2) 豊田秀樹：共分散構造分析 [事例編]－構造方程式モデリング－，北大路書房
- (3) 豊田秀樹：共分散構造分析 [Amos編]－構造方程式モデリング－，東京図書
- (4) 柳井晴夫・他4名：多変量解析実例ハンドブック，朝倉書店